

世界理学療法連盟学会 2025 (World Physiotherapy Congress 2025) 参加記

2025 年 5 月 29 日～31 日

世界理学療法連盟学会（以下、世界学会）が日本で開催されるのは 1999 年の横浜での開催以来で、4 半世紀ぶりの日本開催でした。個人的には 2011 年以来の世界学会の参加であり、国際学会は 12 年ぶり 7 回目の参加だったので緊張とワクワクの感情が入り交じていました。日本開催ということもあり、日本人参加者が多くいるかと思いきや、会場は外国人が多く英語での会話が飛び交い、まるで異国にいるかのようでした。

発表や講演は疾患や障害別のテーマはもちろん、デジタルヘルス、テレリハビリテーション、AI など今の時代らしいテーマも散見し、14 年前に参加した世界学会からの変化を感じました。私が興味を持ったのは私の専門である小児領域の「The 6Ps of the scope of School Based Physiotherapy: Presence, Participation, Partnership, Physical wellbeing, Health Promotion and Prevention」というシンポジウムでした。本シンポジウムではカナダ、ガーナ、イスラエルの各国の学校保健の状況についての報告でした。「6Ps」という概念は特別なニーズをもつ子どもたちの就学支援として新鮮な考え方であり、このような系統だった枠組みに基づけば偏りのない就学支援が実現できると感じました。

私は本学会でポスター発表を行い、「Reliability of Isometric Knee Extensor Strength Measurement Using the Resistance Induction Method in Children with Autism Spectrum Disorder」という研究報告を行いました。自閉スペクトラム症の子どもに対する筋力測定の正確性を検討した研究です。動作の模倣・理解に困難さを示す彼らに対して、正確に測定できる手法を提案し、その信頼性を示しました。発表に際して日本以外にも香港や台湾からの参加者から質問をいただき、具体的な測定場面を動画で説明したり、対象児の特性の詳細を説明したりして、興味をもっていただきました。

国は違っても同じ理学療法士として共通言語で話題を共有できることは、理学療法士が世界共通の資格であることを実感することができました。それと同時に、文化的な違いがあることで患者の見方や対応の仕方が本邦と異なる点もあるため、新しい知見も発見することもできた有意義な学会になりました。

最後に本学会発表に協力していただきました本学教職員、児童発達支援センターとさっくらぶの職員、本研究の対象児とその家族の皆様に感謝を申し上げます。